

平成 22 年 7 月 17 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

平成 22 年 第 7 回講話

嘘をつかない

いつもの質問を致します。

昨日一日、朝起きてから夜寝るまでの間、嘘をつかなかった方？

一瞬にして浮かびますでしょうか。人間は死ぬ時に、走馬灯のように今までの人生がぐるっと回るようです。私も昔、交通事故を起こした時にそういう体験をしました。緊急事態でないと難しいと思いますが、意識してそういうように一瞬にして考えて下さい。

(・・・沢山手が拳がる)

昨日一日、良い日だったと思う方？

(・・・沢山手が拳がる)

何でもよいから一つ良いことを見つけたら、他の悪い出来事を消してしまえばよいのです。そのように私は頭の中を切り替えるようにしています。

昨日一日、有難うと言いい人さまから有難うと言われた方？

「有難う」と言われていなければ、奥様に何かしてあげれば良いのです。家族に何かしてあげると、そこから会話が生まれ日々の生活が好転するようです。

イメージトレーニング

今日の素読は大変気持ちよくお読み戴いたので、初級合格です。初級はすらすらと読めること。

中級は自分で良いなと思う言葉が浮かんで、それを人さまに説明できるし、何時何処でもずっとその言葉が出てくる。自分の身体に染み込んで、一体化してくれば中級合格です。ちなみに私は、その言葉は「利に放りて行えば、怨多し」です。目先の欲につられて衝動的な動きをすると、後で必ずとんでもない事が起きるということです。私はこの言葉を身体の中に染み込ませています。何度もお話していますが、近代資本主義の父と言われる渋沢栄一は「利に放りて行えば、怨多し」を、現代の経営者が身にしみて判断基準としなけ

ればならないし、私は一生涯この言葉を判断基準として守り続けたと言っています。皆さんも自分にあった言葉を論語の中から見つけて戴ければよろしい。中級合格は、良い言葉を見つけて自分自身のものにする事です。

上級は、素読をすると登場人物がいきいきと動き出しているような光景が頭の中に描ければ合格です。ちなみに以前、悟道会が主催して、元オリンピックスケート選手の橋本聖子さんを招いて講演をして戴いたことがあります。国会議員になる前です。お喋りした中で、スポーツ選手はイメージトレーニングをするという話をしてくれました。彼女も試合前に、<走り出して、こういう感じでカーブを曲り、何秒でフィニッシュ・・・> とイメージをするのだそうです。イメージが固まってきて、<これなら大丈夫、絶好調> となった時のタイムと、現実には滑ったタイムは一致したそうです。

これと同じで、素読をして頭の中で生き生きと人物が動き出すというのは、頭の中でイメージを描くわけです。自分がその中の人物と一体化して、他の人物を動かす。そういうイメージが描けると、顔回が好きなら顔回のように、子路が良いなと思えば子路のように、知らず知らずのうちに行動も変わっていきます。ですから上級になると、孔子が良いなと思ったら孔子型の人間になります。渋沢栄一は孔子を尊敬し、孔子をお手本として孔子の真似をすることを言い切って実行していきました。今日のテーマの「言行省察の法」も、孔子の真似をすることが行き着くところまで行き着いて、「三省」に繋がったと言えます。

では、解説に参ります。本日の論語は雍也第六 9~16 です。

【九】 しいわ けん かい いったん し いっぴょう いん ろうこう あ ひと そ うれい 子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に
た かい そ たのしみ あらた けん かい 堪えず。回や其の樂を改めず。賢なるかな回や。

孔子が言うには、回は実に徳が高い。竹で作った弁当箱一杯のご飯と、ひさご（ひょうたん）のお椀一杯の飲み物を飲んで、路地の奥の場末に住んでいる。普通の人には憂鬱でたまらなくなるのに、顔回はどのような場所にいても自分自身が道を学ぶ楽しさを改めない。

貧富によって自分自身の楽しみを改めない。これは素晴らしい徳を持っているなあと、孔子が顔回を褒めています。

さて、論語は現代に置き換えて考えましょう。周りを見て、顔回のような人がいるでしょうか。なかなかいませんね。山田方谷はお殿様から藩政改革を命じられた時に、自分の給料を半分に、粗末な家に住んだ。自分の生活レベルをがたとんと落として、それによって更に自分のやるべきことの意欲をかきたてました。当時、最高実力者に任命されたの

であれば、賄賂が集まって簡単に蔵が建つわけです。しかし山田方谷は一切賄賂を受け取らないで、自分の給料も半減させた。それで備中松山藩の領民の気持ちが、方谷先生はたいした人だとなったのです。

今の時代、方谷のような人が政治家の中にいないのは悲しいなと思います。日本の国の改革をしなければならないという時に、「国会議員の給料を半減しよう」とか、「議員数を半分減らそう」と口では言いますよ。これを与野党一致で実行してご覧下さい。政治家に向ける眼が、今は侮蔑の眼で見ているものが尊敬の眼に変わると思います。なぜそういうことをしないのか。自分が可愛いから。目先の欲があるからです。一人でも二人でもよいから、こういう動きが欲しいと痛感します。

地方自治体で見ると、そういう動きをしている人達が大量に出てきています。ですから、まんざら捨てたものではないと、そのうち言えるかなと思います。次の衆院選挙が楽しみだと思っています。

【十】 ぜんきゆういわ 冉求曰く、し 子の道みち を よるこ 説あら ば ちからた ざるに非ず。力し 足らざればなりと。しいわ 子曰く、ちからた 力ちからた 足らざる者もの は、ちゅうどう 中道はい にしていま 廢なんじ す。今かぎ 女は画れりと。

冉求が言いました。「先生の教えを悦ばないわけではない。自分の力が足りないから、どうしても先生の教えが身に入ってこないのです」

孔子が言いました。「力が足りない者は、途中で投げ出してしまうものだ。お前は、自分で自分の身を閉ざしたのだぞ」

限界を作っては駄目だということです。自分自身で考えて下さい。何かやりたいと思って進めている時に、上手くいかないからこのあたりで止めておこうと思ったなら、「今、女は画れりと」という言葉を思い出して下さい。途中で諦めていないか、初めから自分の力に限界を作っているではないか、と自分自身に言ってくれる言葉です。

私の会社でボディービルをしている人がいるのですが、その人が「筋肉をつけていく時、もう限界だと心から思った時に、更に一搾り、もう一汗かく。その気持ちがボディービルでは必要なのです」と言っていました。武道に関しては皆、同じです。自分で限界だと思う、周りから見ても限界だと思ったところで、もう一歩進むことによって新しいパワーが生まれます。仕事の面でもそうだと思います。「今、女は画れりと」という言葉は非常に良い言葉だと思うので、お使いになるとよろしいでしょう。

自分自身を含めて、自分で自分を画っている、自分で限界を決めていることがありはし

ないか・・・と、この文章をお読み下さい。

鳩山さんは自分で自分の道を書いてしまいました。小沢さんはちょっと違う形ですが、自分で自分の道を書いています。ただ小沢さんはまだ欲があるようで、もう少し違う道がないか探していますから、中道にして廃してはいないと感じます。

【十一】 し しか い いわ なんじ くん しじゆ な しょうじんじゆ な な
子 子夏に謂いて曰く、女 君子儒と為れ。小人儒と為ること無かれと。

孔子が子夏に向かって言いました。お前は人格の完成を求める君子のような学者になれ。こせこせした口先だけの小人のような学者にはなるな。

渋沢栄一は『論語講義』の中で、「経世済民を以て我が天職なりとする儒者を指して君子儒と称し、文芸を講ずるのみをこれ事とする儒者を指して小人儒とする」と言っています。世の中の為になるような学問・儒学を自分の天職だと思わなければ君子儒ではない。実際の役に立つのではなく、口先だけで儒学とはこういうものだと教える。これは単純に文芸を講ずるだけで、仕事としてやっているだけだということです。

更に渋沢栄一は、君子儒と言える者は山田方谷と名指しをしています。それと帆足万里も君子儒を実行している人だと言っています。見渡すとこれは君子儒だという人物が結構いますので、それを掘り下げてみると良いと思います。

世の中の為になることを考えて実行していくのが本物の学問であって、実際の役に立たない口先だけの学問は、似非学問だと思えばよろしいでしょう。テレビで学者が色々なことを言いますが、この学者は世の為・人の為になるようなことを言っているのか、自分の利益になるから言っているのか、その人の話をずっと一貫して調べてみれば分かります。10年くらい前とはまるっきり違うことを言っている学者が結構います。

【十二】 しゆう ぶじゆう さい な しいわ なんじ ひと え いわ たんだいめつめい
子游 武城の宰と為る。子曰く、女 人を得たるかと。曰く、澹台滅明とい
ものあ ゆ こみち よ こうじ あら いま かつ えん しつ いた
う者有り。行くに 径に由らず。公事に非ざれば、未だ嘗て偃の室に至らざるなりと。

孔子の弟子の子游が武城という村のトップになった。孔子がそれを見て、「武城を治めるには、お前を補佐する良い人物を見つけなければいけないけれども、お前はどうか」と聞きました。

子游が「澹台滅明という人間を見つけました。こせこせと近道を歩いたりしない。真っ直ぐの太い道を歩いて行って、公用でなければ私の部屋にも入ってこない。これは素晴ら

しい人物を見つけました」と答えました。

論語の中の会話がそのまま通じた例を申します。以前、或る大手スーパーが太田市に進出する際、最高責任者として来られた店長さんに仕事でお会いして、とても話が合いました。その方が岡山県に転勤することになりました。その頃、私が太田南ロータリークラブの会長をしております、講演をお願いしてあったのです。その方は転勤先からわざわざ来てくれました。その時の会長挨拶で、私がこの論語をお話したことを思い出しました。岡山に行って澹台滅明なる人物は見つかりましたかとお聞きしたら、「それらしい人物が出てきています。もう一息です」と言っておられました。

自分で何か新しい仕事をする時、或いは転勤を命じられた時、片腕になる人物がみつけれられるかどうか新しい仕事が順調にいくかを左右します。人物・片腕とは、どうしてもその人間の人生哲学に共鳴する人です。その人物が見つかるかどうかということだと思えます。目から鼻に抜けるような才子を見つけたのでは、澹台滅明にはなりません。やはり自分自身の人生哲学をしっかりと持っている人で、賄賂を受け取らないような真っ直ぐ真っ正直な人物を片腕に持つが良いと、この章をお読み下さい。

【十三】 しいわ子曰く、もうしはん孟之反、ほこ伐らず。 はし奔りて、でん殿す。 まさ將に門に入らんとして、もん其の馬に い策 そちて曰く、うま馬 すすま進まざればなりと。

孔子が言うには、孟子反という將軍は戦で手柄を自慢しなかった。軍が負けて敗走する時に、殿（しんがり）を黙って務めた。帰って来て門に入ろうとした時に、馬に鞭打ちながら、馬が疲れて走らないから遅くなってしまったのだと言った。殿を務めたことを誇ることはしなかった。

殿というのは、後ろから敵に攻撃されて死ぬかもしれない非常に重要な役割です。秀吉が織田信長の軍の中で重きをなしたのは、殿を務めたからでした。

周りを見て、孟子反のような人物はいるでしょうか。ビジネスで失敗したとか、仕事や家庭で問題が起きてマイナスの時に、どう始末をつけるか。それによって人物の磨かれ方が変わってきます。政治家であれば、落選した時にどう対処するかが自分自身を磨く大きな要素になると思います。

【十四】 しいわ子曰く、しゅくだ祝鮀の、ねいあ佞有らずして、そうちょう宋朝の、びあ美有らば、かた難きかな、いま今の世に、よ免れん、まぬが

こと。

今の世の中で生きていくのは大変だなという話です。

祝は宗廟の神主さんで、鮀は名前です。佞とは、口先が上手なことです。

宋朝は、衛の靈公が夫人の南子を喜ばせる為に宋から迎えた美男子です。

孔子が言うには、祝鮀のように口先が達者で、宋朝のように美男子だというだけで、現代社会を無難に送るのは難しい。

口先上手はすぐに馬脚を現すし、イケメンというだけで世の中を渡ろうとしても、すぐに壁にぶつかる。もっと自分の心を磨いて実力をつけなければ、今の世の中、通用しないということです。これは孔子の時代だけでなく、今の時代もそのままだと思います。

【十五】 しいわ たれ よ い こ よ なん こ みち よ な 子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや。

世の中で立身出世をしていくには、正しい道を通らなければいけない。誰だって外へ出るのに、戸口を通らない者はいない。どうして人として正しい道を通ろうとしないのか。

何故ことを行うのに正しい道を通らないで、脇道・近道をしようとするのか。だから世の中、悪人が増えるのだと孔子が嘆いています。

これもそのまま今の時代に当てはまります。

【十六】 しいわ しつ ぶん か すなわ や ぶん しつ か すなわ し ぶんしつ ひんぴん しか のち くんし 子曰く、質 文に勝てば、則ち野なり。文 質に勝てば、則ち史なり。文質 彬彬として、然る後に君子なり。

彬彬とは、色々なものが交わってほどほどに中和して、いきいきとした盛んな調和を呈している状況です。

質は内面・性質です。文は装飾です。

質が文に勝てば、野人になってしまう。文（外面）だけが質（内容）を凌駕すれば、記録係（文士）のようになるだろう。文と質がどちらも良いようにレベルアップしていけば、後々人格が完成していく。

厚化粧だけしないで自分の心を磨きなさい。そうすれば厚化粧をしなくても、心と外面

とが一致してくる。そのように日々過ごせばよいとお考え下さい。

今回の雍也第六の章句は皆良いなと思いますが、特に印象に残ったのは、「今 女は画れりと」という言葉です。新しい仕事にチャレンジをしよう、身体を何とかしようと始めた時に、途中で止めてはいけないと感じます。

個人的な話ですが、私は年に 1 回人間ドックに入ります。その間の半年経った頃に、かかりつけの医者で同じような健康診断をして貰っています。今年の 2 月に人間ドックで境界型糖尿病と診断されました。これは大変だと思って、糖尿病に関する本を十数冊買って読みました。それから私は食べものを変えて、グラムを量って食べるようにしました。1 日 1 万歩くようにしました。81、8 キロあった体重が今は、74、6 キロになりました。途中、「今 女は画れりと」の繰り返しをしていました。例えば 3000 歩、3000 歩、3000 歩と分けて歩いて、もう疲れたから止めた！ と思うのですが、夜、あと 1000 歩と思って歩きに行ったりしています。もう止めよう、もう止めようと思うのは「画れり」だから、年がら年中「画れり」を克服していかなければいけないなと思いました。

足るを知る

中斎塾フォーラムの基本哲学として、知らず知らずのうちに身につくものをいくつか考えています。根幹にあるのは「知足」です。「足るを知る」という考え方が身体に染み込めば良いなと思ってお話をさせて戴いています。

今、世界がどちらの方向に進もうとしているか、非常に混沌とした情勢だと思っています。日本に至っては、先進国の中からだんだん脱落をしてきている。先進国と言われる中から取り残され、日本人としての特性も劣化していく。そういう国家・民族だと私は認識をしています。

そうならばなるほど、世界の国々の眼がブータンという国に向っていくだらうと思っています。ブータンは他の国と交わらないで、自給自足をして、食べものもそんなに贅沢を求めない。信仰心が篤く、いさかいをせず長幼の序を守る。お年寄りを敬って家族仲良くし、輪廻転生を信じ、それが日常生活に溶けこんでいます。日本の江戸時代と非常によく似た国だと聞いて、家内と一緒に出かけました。その時感じたのは、自給自足で非常に良い循環をしている国が、テレビが入って来たことによって他の文化・文明が持ちこまれ、それによってどんどん物質文明の毒に汚染されてきていました。おそらく 5、6 年、もしくは 7、8 年で物質文明の毒に汚染されつくしてしまっていて、もうブータンがブータンではなく

なるだろうと感じました。それでもその国で常識だったのは、あまりがつつしない・ほどほどが良いという考えが当たり前で、行き渡っていました。

日本もかつてはそういう考え方でした。江戸末期に日本に来た外国人が自分の国に手紙を出すと、だいたい同じようなことを書いていました。日本の国は貧しいけれども心が高い。眼が澄んでいる。誇りの高い民族である。我々民族と比較しても同等のレベルである・・・というようなことを書いて、故国に送っていました。諸外国の眼から見て、日本人は貧しいけれども誇りの高い民族で、自給自足態勢が整っていて、贅沢はしないけれども満足している。非常に見習うべきものが沢山ある国だと理解されていたわけです。

それが今、まるで無くなってしまったと思います。我々はそれをもう一回復活させねばならないだろうと思います。世界が混沌としている時に、日本の中に「知足」「ほどほどでゆこう」という考え方が行き渡ってくると、それに日本が再建できると、世界の国々は日本を手本として見るようになると思います。

世界はグローバル経済で、国を越えて経済は発展してゆくという言い方をしますが、途中で必ず行き詰ると思います。例えば今朝の新聞にもありましたが、コンビニ4社がアジアに出て行ってコンビニという仕組みを輸出しています。日本がもう飽和状態だから、外に出て行かざるを得ないのでしょうか。しかし、アジアが飽和状態になったら、次はどうするのでしょうか。世界は限られています。どんどん同じような仕組みを全世界に広げる事はできません。必ずどこかで壁にぶつかって止まってしまう。であるならば、同じ考え方・同じ仕組みを輸出するのではなくて、どこかで考え方を変わるとか手法を変えるようにしなければ、人類は生き延びられるわけがない。

人類は増えすぎていますから、どこかで大量自殺・大量虐殺が起こりうる。時代の流れでいくと、そういうことになると思います。例えば、戦争で大勢の人が死ぬ、経済的に行き詰って餓死者が大量に出る、自然災害で死ぬとか、おそらく人類の半数くらいが淘汰されるようになるのではないかと考えています。

右肩上がり・もっともっとという考え方を改めて、ほどほど・右肩上がりでない方が良く切り替えることによって、人類は生き延びてゆくことが可能になるだろうと思います。それを国という単位で表現できるのは、日本が最有力だという気がしています。私はそういうことを感じるのに、経済破綻を起こした国を数年前にずっと回ってみました。これからは日本の国は経済的に行き詰まる。行き詰まった時に、日本の国の中で生き延びるためにはどうしたら良いかを、中斎塾フォーラムの中で毎回お話をしていきたいと思っています。

その鍵は、終戦直後の日本を見る必要があると思います。終戦直後の日本は、お金をイ

メージさせる印刷物は皆、使えなくなりました。国債も紙幣も、その当時軍票というものがありました、満鉄の社債も駄目になりました。貯金通帳のお金も、引き出せるようになった時には二束三文でした。必ずこれと同じような状況が又、日本で再現されると思っています。ということは、お金はどこかで見切りをつけて、自分自身が生き延びられる為の食糧が定期的に確保できるような方向へ移っていかねばいけません。具体的には農家と連携をする。又は、自分自身が農家となる。土地の手当てをして、食べものを作る。そういう方向へ日本人全体が進み始める時が来るとしています。ベースにあるのは、「ほどほど」です。自分の家族や身内が食べられて、余ったら他の人に分け与える。昔の下町の人情話のような人間関係を地域的に作っていくことも必要だと思います。政治家の方がそういう方向にリーダーシップをとっていくことが、日本の各地域のあるべき姿になるだろうと思います。

言行省察の法

今日のテーマ、「言行省察の法」という言葉は、渋沢栄一が書きました。論語の中に「三たび省みる」という言葉があります。「三」は、一、二、たくさんという意味です。何度も何度も自分自身の言行を振り返るということです。

渋沢栄一さんは夜寝る時に、今日一日誰と会ってどういう約束をしたか、朝起きてから夜までの間一つひとつ思い出していました。沢山の人が会うので思い出すのも大変でしょうし、時間もかかるでしょうが、ご本人は、「世の中の役に立ちたいと思っているので、自分を訪ねてくる人はどういう人物であっても必ず会って話を聞く。それが孔子をお手本としている自分の役目だ」と言っていました。貴人であっても庶民であっても、老若男女という人でも、必ずお会いすると決めていました。実際に本人はそうしたようです。さすがにかなりお年がたってからは、周りの人が選んで面会をさせたようです。

こういう状況でしたから、渋沢栄一さんは多分会ったことを忘れて、約束を忘れるのだと思うのです。これはいけないとどこかで感じて、論語の三省を使い出したのだと思います。夜寝る前に一日の出来事を思い出し、誰に会ってどんな約束をしたか思い出す。それで安心して眠る。それが習慣になり、いつの間にか記憶が確かになって、世間で渋沢老人の記憶術と言われるようになったと書き残しています。八十代になってからのことです。図らずもこの方法で、渋沢栄一さんはボケない術を実践していたと思います。暫くぶりに会った人に、「　　さん、1年前にお会いした時の話は、その後どうなりましたか」と、すらすらと出たという話もございます。

ボケない人のちょっとした習慣

今日ご紹介する本は、『なぜかボケない人のちょっとした習慣』です。渋沢栄一さんの話とリンクしたので選びました。

今、日本人の平均寿命は男性が 79 歳、女性が 86 歳を越えています。日本人の寿命は戦後、劇的に延びました。明治時代は大雑把に言うと 30 歳代、大正時代が 40 代、昭和 22 年に日本人の男性の寿命が 50 歳に延びたと内閣府統計局の資料にあります。寿命が 50 歳になったのは、つい最近なのです。

余談ですが、皆さんは日本の国の年金は当然貰って当たり前だと思いますか？ 貰えなくて当たり前だと思いますか？ もともと年金というのは、日本が戦争をするのに軍備調達の為に国民からお金を巻き上げる手段として考え出された仕組みです。昭和 22 年頃は寿命が 50 歳だったのですから、60 歳になって生きている人はそれほど多くないわけです。だから入ってくるお金はどんどん使ってしまうと放言してもおかしくはなかった。ところがあつという間に平均寿命が延びたので、年金が底をついてしまう状況になったのです。

60 歳を過ぎると、やはり身体がまともに動かない。私は自分自身で考えて、55 歳を過ぎて急激に身体にガタが来ました。58 歳でシムックスの社長を譲りましたが、その時にはどうしようもないくらい身体がまいっていました。やはり 60 歳というのは一つの定年だと感じます。

この本は斎藤茂太さんというお医者さんが書いたものですが、定年を過ぎたら何か趣味を持ちなさいと勧めています。仕事が趣味だという人が定年で会社を辞めてしまうと、そのままあの世に逝ってしまうという話はいくらでもあります。仕事以外に違う趣味か何かを持った方が良いと思います。私は 50 代後半から詩吟をやりたいと思っていました。たまたま詩吟の先生にめぐり合って、すぐに弟子にして戴きました。詩吟は誰にも迷惑をかけないし、自分ひとりで楽しめる。人さまにもちょっと教えてあげられるし、仲間作りも出来る。更に健康にも良い。詩吟を趣味にしたいとっていて、今はそれがかなって良かったと思っています。

この本の中には、年をとったら必要なものとして、一つは趣味を持つこと。そして遊びの三原則として、非日常であること・利益を考えないこと・自由にやりたいことをやることとありました。自分のやりたい事がやりたいように出来る自由を持つ。時間であったりお金であったり、色々な自由がありますが、やりたい事がやれる環境を作っておきなさいと書いてあります。趣味を作っていく時に、これで儲けてやろうと考えると、ちょっと反

れてしまいます。

二つ目は、食欲があることだそうです。私の母は今93歳で独り暮らしですが、見ていると食欲がある。非常に小柄ですが、食べたいという意欲だけは強いので、自分で食事を作ります。やはり年をとったら、食欲があるかないかが大きな鍵のようです。

三つ目は、好奇心を持つこととあります。

これらが年をとってもボケない秘訣だと紹介されています。

論語に「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」とあります。十代は学問の基礎をしっかりと学ぶ。二十代は何をやっても許されるから書いてありません。三十代は結婚をして家庭を築く。生活の基盤が出来る。四十代は、これで一生をやろうではないかと迷わなくなる。五十代は、この仕事は自分が一生涯を通じてやるべき天から与えられたものだと思える。六十代になると、自分の限界が見えてきて色々な人の話しも素直に聞けるようになる。しかし自分の説は簡単に曲げない。七十代になると、自分のやりたいことをやりたいようにやって、世の中のルールは踏み外さない。そういう人生が送れる。

60代になると自分の体力・能力にだいたい一つの限界を感じるから、後進を育てようという感じになってくる。ですから世の為・人の為に尽くそうと感じるようになったら、その人は真っ直ぐな正しい道を歩んでいるのだと考えて戴いて結構だと思います。渋沢栄一さんは孔子をお手本にして、日々の動きの中で判断に困った時は論語をめくって、この判断でいこう！と思える、それが論語だという言い方をしています。

論語に限らずどんな本でも良いから、自分が判断に困った時に手に取る本を1冊は持っておく必要があると思います。私は『論語講義』という本にぶつかりました。

良い人生を送るには三つの方法があると佐藤一斎が言っています。「三学戒」というものです。第一のコースは、天地自然を相手とする。天地自然を師匠と出来る人間は、最高に素晴らしい人生が送れる。それが出来なかったなら、生身の身体をもった人格者を師匠にする。良い人物に出会って、その人を師匠と呼べるようになれば素晴らしい人生が送れる。それが第二のコースです。第三のコースが、良い書物に巡り合うことです。良い書物に巡り合って、それを熟読玩味して自分自身の血肉に出来れば素晴らしい人生が送れるということです。これは『言志四録』に入っていますので、興味がありましたらお読み下さい。

以上で本日の講話を終了に致します。有難うございました。